

永井一郎「ギラルドゥスは『ウェールズ案内』末尾でなぜ矛盾含みの叙述をしたのか
—ギラルドゥス・カンブレンシスを理解するために—

第2部： 特別講演 Rhan 2: Y Ddarlith Arbennig

ギラルドゥスは『ウェールズ案内』末尾で

なぜ矛盾含みの叙述をしたのか

—ギラルドゥス・カンブレンシスを理解するために—

永井一郎

Why Giraldus Cambrensis made contradictory description in his “Descriptio Kambriae” ?

Ichiro Nagai

In “Descriptio Kambriae” Giraldus Cambrensis included three contradictory chapters: “How the Welsh can be conquered”, “How Wales should be governed once it has been conquered” and “How the Welsh can best fight back and keep up their resistance”.

In this paper I shed light on these contradictory chapters. I focus, in particular on the following points when Cambrensis wrote “Descriptio Kambriae”.

- (1) Giraldus’ duality in blood, education, and task under Henry II.
- (2) The political situation in south Wales during the second half of the twelfth century.
- (3) The difference between English and Welsh principles of administration.
- (4) Giraldus’ estimation of the Welsh people and self-identification.

ギラルドゥス・カンブレンシス(Giraldus Cambrensis)は1194年に発表した『ウェールズ案内(Descriptio Kambriae)』の結論部分を相互に矛盾する3つの章で構成している。各章のタイトルでこれを示せば、第2巻8章と9章はそれぞれ「どうしたらこの人々[=ウェールズ人]を征服できるか」および「征服後[ウェールズ人]はどのように統治されるべきか」について具体策を提示し、逆に第10章は「どうしたら[ウェールズ人]は彼ら[=アングロ・ノルマン]に反撃し、抵抗を持続できるか」、その方法を述べている。まったくの外部者であればこうした結論構成をしても不自然ではないが、ギラルドゥスは、以下で紹介するように、いろいろな点でイングランドとウェールズ双方の支配者たちと深く交流しており、何か彼自身に由来する積極的な理由があったと考えるべきであろう。

本報告はこの理由を『ウェールズ案内』執筆時にギラルドゥスがかもっていた

個人的条件や彼の眼前で展開していた南ウェールズの政治的・軍事的状況から探る試みである。末尾 3 章が提示する謎が本報告で完全に解消するとは思えないが、12 世紀末に彼がもっていた諸条件から謎を解く手がかりが得られるのではないかと期待している。また、これとは別に、当時彼がもっていた判断基準を整合的に掌握できれば、そこから『ウェールズ案内』全体をより正確に理解することもできるであろう。とにかく真偽が取りざたされる同書の記述を史料批判し、著述の意図を正確に把握する途が開けるわけで、本報告のサブタイトルにはこうした希望も込められている。

ギラルドゥスは血統の点で二元性をもっていた。彼の血統のうち四分の三が南ウェールズに定着したアングロ・ノルマン貴族の家系に属し、四分の一は南ウェールズの古い王家に属していたのである。彼は生まれながらに南ウェールズの政治世界を象徴する存在であったが、他の面でも彼の二元性は目立っている。第 1 に、少年期まで南西ウェールズで過ごした彼はこの地域の自然や社会から多くのものを吸収したが、その後イングランドで聖職者としての教育を受け、さらに 10 台後半から 12 年間パリに留学している。彼は若くして当時としては最高レベルの文明社会と比較的プリミティブな社会をともによく知り、両者を比較することができた。第 2 に、彼の活動の場もイングランドとウェールズにまたがっていた。第 1 回パリ留学(1162~74 年)後、彼はイングランド王ヘンリ二世に仕え、その命を受けて南ウェールズで熱心に教会改革を進めた。また、第 2 回パリ留学(1177~79 年)後は、王宮でヘンリの対ウェールズ政策を援け、しばしば王の使者として南ウェールズの有力な支配者たちと交渉している。その際彼のもつ血統の二元性が役立ったことは言うまでもない。

では、彼の活動の場であった南ウェールズの政治状況はどのようなものだったのか。範囲を 12 世紀全体に広げて簡単に見ておこう。

1100 年にイングランド王となったヘンリー一世は、即位後まもなく明確な対ウェールズ政策を打ち出した。近い将来全ウェールズを支配下におさめるという長期的目標を掲げ、2 つの具体策に着手したのである。ひとつは、ウェールズ人領主たちの勢力、特にデハイバース王国の再興をもくろんでいたグリフィズ・アップ・リース(Grudffudd ap Rhys)を抑えること、もうひとつは、前世紀にこの地域に定着し自立性を高めつつあったアングロ・ノルマン領主を完全に掌握することである。その際彼が駆使したのが封建君主権であった。ウェールズにも封建制度を導入して、安定的支配を確立しようとしたのである。

しかし 1135 年に即位したスティーヴンは、王位継承権をめぐる抗争に巻き込まれ、ウェールズに力を注ぐ余裕を失った。これをチャンスとみたウェールズ人支配者たちは連携してアングロ・ノルマン領主たちを攻撃し、領地を回復した。その結果リース・アップ・グリフィズ(Rhys ap Gruffudd)の下でデハイバース王国がほぼ再興された。ギラルドゥスが生まれたのはこの時期である。

1154 年にヘンリ二世の統治が始まると、状況は逆転した。彼はヘンリー一世の対ウェールズ政策を継承し、全ウェールズの征服を念頭におきつつ、その時々的情勢に応じてウェールズ人領主、特にその中軸的存在であったリースに対し

永井一郎「ギラルドゥスは『ウェールズ案内』末尾でなぜ矛盾含みの叙述をしたのか
—ギラルドゥス・カンブレンシスを理解するために—

て軍事的・政治的圧力をかけた。リースは形式的な服従でヘンリの圧力をかわそうとしたが成功せず、繰り返し軍事的制圧を受ける中で、本源地以外の所領をすべて奪われてしまった。ギラルドゥスの少年期はこのようにウェールズ人側が圧倒的に不利な状況にあった。

しかし、ギラルドゥスの第1回パリ留学中に再び状況は変化した。1164年にリースが南北ウェールズ人支配者たちをまとめ、各地でアングロ・ノルマン領主たちから所領を奪回したのである。中でも1165年に北ウェールズ山中でヘンリの軍勢を打ち破り、撤退させたことが大きな意味をもった。以後ヘンリは軍事的にウェールズを制圧する政策から、彼らの支配力を利用して間接的に統治する政策に転換した。その表明が1172年にリースに与えた称号「南ウェールズ全域で王の代理をつとめる *yustus*」である。ギラルドゥスがパリ留学から帰国し、ヘンリの命を受けて南ウェールズの教会改革に従事し始めたのはその2年後1174年である。以後彼が再度パリに留学する1177年までの間ヘンリとリースの関係は良好で、南ウェールズにおけるリースの勢力はピークに達した。リースはウェールズ人領主たちの代表としてヘンリとしばしば会見し、軍事行動が必要な場合には相互に軍隊を送って支援しあっている。

リースの支配力にかけりが見えるようになるのは、ギラルドゥスがパリ留学から戻った1179年以降である。ちょうどこの時期に、それまで父の政策を支えてきた息子たちの中から、リースの意に反する行動をとり南ウェールズに混乱をもたらす者が出てきた。治安維持に責任をもつリースは当然これを押さえ込むが、身内だけに完全な排除は難しかった。混乱は、それまでリースに押さえつけられていたアングロ・ノルマン領主たちにとって勢力回復のチャンスとなった。リースは以後死去するまでの10年間身内の不平分子とアングロ・ノルマン領主たちの動きに悩まされた。加えて、1189年にはヘンリ二世の死去によってリースは王の代理人という制度上の支柱を失った。次王リチャード一世はウェールズ政策に関心を示さなかったため、南ウェールズの領主たちは、ウェールズ人、アングロ・ノルマン人を問わず、自己利益追及に走り、ますます混乱が深まった。

1196年にリースは、こうした状況を打開するため南ウェールズ各地で軍事行動を展開し、一時期その勢力は全南ウェールズに拡大した。しかし、彼にこれを長期間保持する力はなかった。1197年にリースが死去すると、デハイバース王国は崩壊し、南部におけるウェールズ人勢力は急速に衰えた。ギラルドゥスはこうした状況変化の中でヘンリに仕え、イングランドとウェールズの仲介役を務めていたのである。

ギラルドゥスは南ウェールズの政治状況、特に1174年から1189年の間に発生した諸事件についてよく知っていた。第2回パリ留学の期間を除き、彼はこの間イングランド・ウェールズ関係の現場にいたわけで、双方の状況を熟知していた。そうでなければ彼の職務は務まらなかった。加えて、1173年以前の事件についても彼は十分な知識をもっていた。この点は彼の著作に含まれる1173年以前の出来事への言及を見るとよくわかる。したがって、ギラルドゥスは『ウ

『ウェールズ案内』末尾の3章を、12世紀中に展開されたイングランド・ウェールズ関係に関する豊富な情報、それも、多くは現場で直接入手した情報をもって構想、叙述したと判断してよい。とすれば、両国の関係が今後大きくイングランドに有利に展開し、デハイバース王国に代表されるウェールズ人勢力が苦しい立場に追い込まれることを、彼は執筆時に予想できたはずである。

以上はギラルドゥス表面的知識、すなわち、彼が同時代の政治的・軍事的事件をどれだけ知って『ウェールズ案内』を書いているかについて検討した結果である。しかし、末尾3章のような一国の命運を推測する作業では、政治世界の構造にまで立ち入って彼の知識を確認しておく必要がある。彼は、その鋭い政治感覚からして表面的な状況のみで判断を下す人ではなかったと思われるが、イングランド王国やデハイバース王国の統治原理や構造をどのように理解していたのだろうか。

イングランドでは11世紀末までに封建王国の原理と制度が定着していたが、12世紀になるとウェールズにもこれを適用する動きが明確になった。ヘンリー一世のウェールズ政策である。ただし、導入された封建制の効力は、相手がアングロ・ノルマン領主であるかウェールズ人領主であるかによって大きく違っていた。前者であれば、その領地は征服によって比較的最近取得されたものであり、王から与えられた場合は無論、自力で獲得した場合でも王の承認が必要であったから、封建制がそのまま受容されて定着する可能性が高かった。王はある領主が自分に十分な忠誠を尽くさないと判断すれば、容易にその所領を没収することができた。それが双方にとって了承済みのルールだったからである。これに対してウェールズ人領主の場合には、封建制は征服にともなってイングランド王から押し付けられた制度であり、そのルールが充分理解されていたわけではなかった。彼らは、軍事的状況からやむなく封建制を受け入れても、状況の変化があって王の直接的支配が緩めばいつでも破棄できる単なる約束事とみなしていた。王もこの点を承知していたので、彼らから繰り返し忠誠の誓約を求め、違約に備えて多くに人質をとった。

ヘンリー二世は統治の前半でこのような政策を採っていたが、後半になると上述のようにリースの威信と実力を利用する間接的な統治に切り替え、封建君主としての位置を保持しながら宗主権のみを要求する政策を採った。

では、リースの支配はどのような原理ないし性格をもっていたか。彼は他のウェールズ人領主たちに対しデハイバース王として君臨したのであるが、その内容はイングランド王の支配権と大きく違っていた。彼の支配力はもっぱら個人的な力によって、すなわち、カリスマ的な威信、手勢を中核とする軍事力、さらには、古い王家の血統によって支えられていた。換言すれば、時代・地域をこえて適用可能な支配の原理や制度・組織を彼はもっていなかった。彼の死後すぐにデハイバース王国が崩壊した最大の理由がここにある。支配される領主たちはみな先祖伝来の本源地「父祖の土地(*tref tad*)」をもち、リースによって軍事的に制圧されても本源地まで没収されることは少なかった。リースは支配下のウェールズ人領主の自立性を根こそぎにしなかったわけで、これでは広

大な統一的権力を長期間保持するのは難しい。彼がデハイバース王国再興を目標に掲げながら、これと矛盾する「イングランド王の代理人」という地位を甘受した理由を推測すると、積極的な理由は言うまでもなく強大な支援者を得て自らの支配を強化することにあっただが、消極的な理由として、デハイバース王国再興に必要な権力を古来ウェールズ人が共有してきた統治原理から引き出すのが困難だったことも挙げられよう。

ギラルドゥスは上記2種類の支配権についてよく知っていた。一般的に言っても、支配の構造や原理について正確な理解をもっていなければ深慮を要する外交使節の役割を果たせなかったであろう。実際、『ウェールズ案内』に先行する著作『アイルランド征服』や『ウェールズ旅行記』で彼は封建制や「父祖の土地」に言及している。

そのギラルドゥスは、イングランドとウェールズにおける支配権の相違から、両国の命運についてどのような予測を立てていたのであろうか。彼自身はこの点について語っていないが、上で紹介した諸点から引き出しうる推測を述べておこう。まず、彼は統治の原理や制度で言えばイングランドの封建制のほうが優れていると評価しており、もし両国が全面対決すればまず間違いなくイングランド側の勝利に終わると予測していたであろう。とすれば、『ウェールズ案内』末尾3章のうち第8、9章における彼の提案はごく自然に理解できるが、第10章は難しい問題にぶつかる。すなわち、彼はあえて敗北必至の側に立って、自らの予測とは反対の施策を提示していることになるからである。これをどのように考えたらよいのか。政治状況や職務とは別に、彼が親ウェールズ的スタンスを取る理由があったのか。こうした疑問を解くために、次にギラルドゥスがもっていたウェールズの住民と社会に対する評価を検討してみよう。

ギラルドゥスは古いウェールズ王家の血を引き、南ウェールズで育てられたから、その自然や住民についてよく知っていた。また、聖職者・政治家としての活動や栄達の目標は深くウェールズとかかわっていた。したがって、彼がウェールズ人や社会に対して強い関心をもっていたことは間違いない。しかし、これは必ずしも彼がウェールズ人としていわば愛国心をもっていたことを意味しない。むしろ、彼のウェールズ人・社会に対する評価は厳しく、自分をウェールズ人よりも高い位置にいる者と認識していた可能性が高い。ただし、彼はアイデンティティの中軸をアングロ・ノルマン貴族の血統においていたのではない。むしろ、両者を超越していると自認し、当時の西ヨーロッパで最高の文化を自ら体現しているという誇りをもっていたと思われる。著作に見られる彼の自尊心は大変なものである。

その国でどれだけ文明が発達しているか、これが彼の評価基準だったが、彼はウェールズを「奇妙」で「野蛮」な国とみなしていた。こうした表現を彼はもっぱらイングランド王宮で生国ウェールズを紹介する際に使っており、王宮の人々の共有する先入観に合わせた部分もあったと思われる。しかし、彼自身がそう考えていなければ「野蛮なウェールズ」といった断定をすることはなかったであろう。事実、彼が『ウェールズ案内』でウェールズ人・社会のデメリ

ットとして挙げている点を見ると、政治的には統一的支配の欠如、軍事的には統率の取れた軍隊の欠如、経済的には商業の欠如と農耕の未発達など、文明の低さが強調されている。彼は、アングロ・ノルマン王国は文明度においてははっきり優位にあり、より進歩した社会を体現しているから、ウェールズもこれを見習わなければならない、と言っている。

以上のような認識をギラルドゥスがもっていたとして、これは『ウェールズ案内』末尾の 3 章の執筆に際してどのような影響を与えたと考えられるだろうか。影響の方向はここでもイングランドに有利、ウェールズに不利である。文明度にはっきりとした差のある 2 国が戦えば、文明度の高いほうが最終的に勝利すると考えるのはごく自然であろう。したがって、ギラルドゥスの両国に対する評価を踏まえても、第 8、9 章の説明は容易だが、第 10 章については謎が残る。加えて、『アイルランド征服』の結論部分がアイルランドの征服と統治を勧め、その方法を提案する 2 章のみによって構成されていることも注目に値する。すなわち、同書には『ウェールズ案内』第 2 巻第 8、9 章に相当する部分はあるが、第 10 章に相当する独立保持のための提案は含まれていない。両書が近接して発表されており、基本的に同じ政治状況を踏まえていることからすれば、ウェールズの場合は第 10 章を追加すべき特別の理由があったのであろう。

このように本報告の終わりにいたっても謎は解けぬままに残っている。今後さらに他の分野における彼の行動や判断基準から検討を続ける必要がある。